

新

歌人群像

# 杉浦翠子

●時流に媚びず、権威に屈せず

●伊東悦子●



二人の庇護者のもつこ

杉浦翠子みどりこは一八八五（明治十八）年、現在の埼玉県川越市に、父岩崎紀一、母サダの六人目の子として生まれた。代々名主をつとめた家の分家だが、当時はすっかり没落しており、かつ、婿養子の父も書画に親しみ漢詩をよくするなど風雅の人で、生計の道には遠かったという。その父は翠子三歳の時に、美人で才気煥発さいきかんぱつであったという母も四歳の時に亡くなり、以後は祖母に育てられた。

そんな岩崎家を救ったのは、幼い頃から神童と言われ、のちに福沢諭吉に見込まれて諭吉の次女と結婚、福沢家の養子となった次男桃介である。翠子より十八歳年長の桃介は、当時すでにアメリカ留学から帰って実業家として名を成していた。翠子は十四歳で祖母も亡くなると、その東京・西麻布の、書生や老女、女中達が何人も居る大きな屋敷に引き取られ、女子美術学校や国語伝習所に通いつつ徹底した上流家庭婦人としての躰しづかを受け、桃介の名声の庇護ひごのもと、上流社会の仲間入りをしていくことになるのである。

翠子が、もう一人の生涯の庇護者となる杉浦非水ひすいと結婚したのは、一九〇四（明治三十

若き日の翠子（『近代埼玉の女性文学』より・さいたま文学館提供）



## 「アララギ」での軋轢と退会

さて、翠子が歌を作り始めたのは三十歳頃七）年、まだ十九歳であった。非水は次姉の夫で日本画家の出淵豊保と同じ四国松山の生まれで、東京美術学校在学中にたびたび同家を訪ねて来て翠子と知り合ったのである。非水は本名朝武、商業美術家で、中央新聞社や三越百貨店の図案主任などから多摩美術学校長となり、晩年には芸術院恩賜賞を受賞した人。兄桃介を剛の人とすれば、夫非水は実に優しく温和な人柄であったとか。翠子はこの二人の優れた男性に守られていたからこそ、生涯天性の無邪気さを失うことなく、時流に媚びず、権威に屈せず、自我を主張する生き方ができたのであることは言うまでもない。

さて、翠子が歌を作り始めたのは三十歳頃

のことである。非水が北原白秋の弟、北原鉄雄の友人で、その紹介でまず白秋に教えを請うたが、間もなく白秋を離れ、一九一六（大正五）年には、かねて『赤光』を読んで心酔していた斎藤茂吉に直接弟子入りしたいと申し込んで許される。

当時のアララギは、島木赤彦が牽引車となつて編集も軌道に乗り、今井邦子、三ヶ島霞子、原阿佐緒らが華やかに活躍していた頃で、翠子もまた持ち前の才気で急速に彼女達の仲間入りをしていく。

そんな意気込みの表れとして、一九一七（大正六）年、はやばやと第一歌集『寒紅集』を出した。小型ながら装丁は非水が担当、巻頭に白秋、茂吉、赤彦、古泉千樫の序歌を掲げた美しい本だった由で、作品も女らしい甘い感覚に溢れている。

いかに我れのならんとすらん酔ひしれて  
畳の上ゆたたんともせず 『寒紅集』  
寂しけど籠に囀るカナリヤのことごと  
と餌を啄ばみにけり

アララギ入会後の翠子は、正岡子規や伊藤左千夫を学べという赤彦や茂吉の教えによく耳を傾けたものの、決して鵜呑みにはせず、自分なりの意見を述べたりするようになる。

当時のアララギ会員の多くは地方出身の男性達であったから、ただでさえ数少ない女流歌人は目立つ存在であったろう。なかでも華やかな才能と美貌を併せ持ち、世間的な名流夫人でもある翠子や邦子がジャーナリズムなどで何かと比較され競わされたりするうちに、互いに意識するようになるのは無理のない成り行きであつたろうと思う。

そんな折も折、アララギを揺るがすような大事件が起きた。例の東北大学教授石原純と原阿佐緒の恋愛事件である。多くの新聞雑誌が面白可笑しく煽りたてる中で、阿佐緒自身も女性誌などに手記を発表。

これに対して、求められてペンをとることになる翠子や邦子なのであるが、こんな場合にも翠子は、ただ思ったまま遠慮なく非難してしまう。この何事にも遠慮のない書き方が、ある面からは非常に面白がられ、またある面からは響感を買ひ、アララギ内はもちろん、歌壇からも疎んぜられた原因ともなるのだが、一方の邦子は世間をよく知っているだけに、二人のためにもアララギのためにも、より同情的に書き、翠子の対応を快く思わなかつたらしい。世に喧伝される二人の軋轢は、この事件への対応の差によりさらに深まっていったのである。とはいえ、翠子は邦子に対して生涯競

# 杉浦翠子

争心と共に親近感を抱き続けていたようで、その死の報には取り乱すほど悲しんだという。

病む我に絵を見せばやと夫来り壁に釘  
うち絵を垂したり  
みずからの命に深き盟もてり子のあり  
なしを我にな問ひそ

「藤浪」

翠子の第二歌集『藤浪』は、一九二二（大正十）年十二月に上梓された。が、ぜひ序文をと請うた直接の師、古泉千樞はついに書かなかった。近年の翠子の態度が「あまりにいい気になり過ぎていて」という理由である。反感は赤彦ら発行所も同じであった。

アララギ内で唯一、翠子の理解者である茂吉はちょうど欧州留学中で東京を離れており、海を越えて来る双方の訴えを聞いて、結局、そんなに面倒なら翠子を破門したらいいでしょう、と赤彦に書き送ったのだという。

その結果、一九二三（大正十二）年五月号作品評で藤沢古実から徹底的な酷評を浴びせられた翠子は、一人大いに怒り苦しみ悩んで出詠を中止、とうとうこの年十二月に退会してしまふのである。

## 「短歌至上主義」を創刊

翠子はその後、白秋、秋迫空などの好意に迎えられて創刊されたばかりの「日光」の同人となり、さらに白秋の薦めにより一九二四（大正十三）年に「香蘭」同人となる。さすがにこの時期からは歌作に集中するが、一方では例の負けん気で東京日日新聞に対アララギ論とも言うべき「子規打倒論」を連載し、やがて誰憚ることなく有名歌人の作を例にした

りしてかなり激しい調子で書いたから、ほうぼうからますます響盛を買うことになった。ただ、翠子自身にとつてはちょうど自らの作歌に対する考えを確かめるべき時期に当たっていたようで、〈従来の主情的甘さから脱却して、冷静に現実を凝視し、把握せよ〉へしかもそこに苦しみ悩みつづき生きる一人の人間の声を生々しく刻みつけよ」という翠子のいわゆる「主知主義短歌」は、この時期の模索の中から生まれたものであろう。

意欲旺盛、第三歌集『みどりの眉』（一九二五年）、小説『愛しき歌人の群』（一九二六年）、歌集・歌論集『朝の呼吸』（一九二七年）、小説『彼女を破門せよ』（一九三三年）等を次々に刊行した。

冬に入りてあかくさびにし杉の葉が雨  
降るごとに色立ち直る

『みどりの眉』



1921(大正10)年、斎藤茂吉波欧送別歌会で。右から2人目が翠子、隣が茂吉、左から3人目は島木赤彦（さいたま文学館提供）

白牡丹さき極まれば葎いでて花のかた  
ちがひらたくなりぬ

アララギでの勉強の成果ともいうべき丁寧な写生歌で、茂吉の濃い影響が伺えよう。

一九三三（昭和八）年十一月、いよいよ翠子は自ら「藤浪会」を創立、歌誌「短歌至上主義」を創刊する。「香蘭」主宰村野次郎が、やはり一人として収まりきらない翠子に、選歌欄の会員を連れての独立を勧めたのであ



晩年の杉浦非水・翠子夫妻。1959(昭和34)年

る。創刊号に集まったのは常見千香夫などほとんどの気鋭の男性二十四、五人。

翠子は早速「斎藤茂吉論」の連載を始め、また翌年には新進気鋭の草川乃芙夫(のちの大野誠夫)も同人に加わるなどして、会員は百人、二百人と増えていった。この頃は、時に非水と画と歌の合作展を開催したり、浅間山麓に別荘を求めするなど、公私ともに充実した時期で、実力をもっとも如実に示した歌集と定評のある第四歌集『浅間の表情』(一九三七年刊)は、こうした生活の中から生まれたものである。

大いなる声あげてみたく思ひたり陽を背に負うて暮れゆく浅間よ『浅間の表情』

指のあひより光は透けりゆるやかなる  
握りこぶしに螢を掴めば  
冬の夜は近よりて語れわが息に君が眼鏡の球くもるまで

豊かな自然、睦まじい夫など身近な日常をおおらかに甘やかに詠いながら、おのずから品格を感じさせる端正な調べが翠子短歌だ。

この家の暖簾のかけに夜稼ぎのをみな  
昼寝のあからさまなる 『浅間の表情』  
モルモットも兎も並ぶ夜店なり人の貪りのかくも果てなき

翠子は翠子なりに、急激な社会の動きを批判し、時代の変動について考えているのだ。

憚りて恋ひしとも書けぬ筆なりき封じ  
の糊に口打ち湿らす 『浅間の表情』  
この手紙ひとに頼みがたく出しに来て  
ポストの底に落つるを聞きたり

恋歌のようなこれらの作は、師茂吉への思いついという。さまざまな経緯はあっても、茂吉は何かと翠子を気にかけており、二人は生涯心許しあった師弟であったと自負していた翠子は、茂吉没後『純愛三十年茂吉の手紙』(一九五四年)なる書を刊行したが、「純愛」

の語ゆえに、さんざん悪評を買ったとか。

さて、戦争末期に戦時歌誌統合により終刊した「短歌至上主義」が、「短歌至上」と名を改めて復刊するのは一九四七(昭和二十二年)になってからのことである。終戦後、すぐに疎開地軽井沢から謄写印刷で「不死鳥」を発行し、歌集『日の黒点―敗戦百首詠』(一九四六年)も刊行してはいたものの、最も頼りにしていた愛弟子誠夫、千香夫らはすでに自分達の歌誌「鶏苑」を発行、かつての会員の多くも参加しており、再び翠子のもとには戻らなかった。最後の歌集『生命の波動』(一九五二年刊)は、戦後の日本全体の苦しさに、そんな翠子自身の体力、気力の衰退とが重なった痛みがしみじみと詠われている。

雪と氷こほりに雪のいてみちを踏めば  
かつかつ寒を切る音 『生命の波動』  
人間が人間を見にゆく銀座なり用なき  
人の漫歩に賑はふ

翠子は一九六〇(昭和三十五年)年二月十六日、渋谷区の自宅で没した。享年七十五。

(いとう・えつこ「潮音」編集委員)

歌誌「短歌至上」は、翠子の死により終刊したものの、その後、翠子を慕う弟子たちにより復刊され、現在も継続発行されている。